

# ユーロの国際的役割 – ドイツ・マルクとの比較

田中 素香

中央大学経済学部教授、日本EU学会理事長、日本国際経済学会副理事長、ジャン・モネ・チェア

国際通貨の機能には、大きく分けて、国際契約・決済通貨と国際資産通貨という2つの次元がある。国際契約・決済通貨としては、第3国間の貿易の契約決済に使用されるつかということであり、貿易業者レベルでは「貿易媒介通貨」、銀行間取引のレベルでは「為替媒介通貨」として役割を果たしている。国際資産通貨は資金の国際調達・国際投資に利用される通貨であり、ボンド、ノート、短期証券のような証券次元のものと、国際預金・銀行貸付に使用される通貨として理解できる。通貨当局レベルでも外貨準備は国際資産通貨としての側面をもっている。

本来国際通貨というのは第3国間の国際貿易・国際決済に利用される通貨であって、2つの次元の媒介通貨が「本来の国際通貨」である。しかしグローバル化によって国際的な資産に対する取引が大規模化してきたので、国際通貨論は「本来の国際通貨」を論じるだけでは不十分となっていると考える。国際資産通貨をも取り入れることが要請されている。

英文フルペーパーでは、1990年頃EMSの安定を背景に西欧の為替媒介通貨となったドイツ・マルクと比較しながら、ユーロの国際通貨としての役割を紹介し、その評価を述べた。

マルクは、EMSにおける為替相場安定、プラザ合意以後のドルの浮動的な相場展開およびEC域内市場統合における資本移動自由化による西欧金融資本市場間の活発な資産取引を背景として、ドルよりリスクの小さいかつコストの安い為替媒介通貨として西欧の外為ディーラーがドイツ・マルクをドルに替わって選択したことから、「西欧の為替媒介通貨」として国際通貨に上昇した。しかし貿易媒介通貨としての発展はまったく見られず、国際資産通貨としてもポンド、仏フランなどを圧倒するところまではいかなかった。

ユーロはかつてのマルク圏諸国をユーロ域に転化して生まれ、ユーロ圏としてはユーロ未参加のデンマーク、スウェーデンと東欧諸国、若干のアフリカ諸国くらいしか包摂していない。かつての西欧諸国のような周辺諸国がないために為替媒介通貨としてはマルクに劣るが、東欧の貿易媒介通貨となり、かつ国際資産通貨としては、02年以降のドル下落期に産油国の預金をかなり引きつけている。とりわけロシアの外準の3分の1、外貨預金の3分の1はユーロ建てである。このように、ドル・ユーロ相場の動きに連動してユーロへのシフトが観察される。累積経常収支赤字の是正のための調整期においてはユーロがドル売りの最大の受け皿となると期待される。

このように国際通貨ユーロの存在意義は、その国際資産通貨としての機能になり、国際契約・決済通貨の機能にはないと評価できる。